

梶井基次郎

冬の  
日





冬

の

日



## 一

季節は冬至に間もなかった。堯たかしの窓からは、地盤の低い家々の庭や門辺べに立っている木々の葉が、一日毎剥はがれてゆく様が見えた。

ごんごん胡麻ごまは老婆の蓬髮ほうはつのようになってしまい、霜に美しく灼やけた桜の最後の葉がなくなり、櫂けやきが風にか

さかさ身を震わす毎に隠れていた風景の部分が現われて来た。

もう暁刻の百舌鳥も来なくなつた。そして或る日、屏風の  
ように立ち並んだ櫛の木へ鉛色の椋鳥が何百羽と知れ  
ず下りた頃から、だんだん霜は鋭くなつてきた。

冬になつて堯の肺は疼んだ。落葉が降り留っている井  
戸端の漆喰へ、洗面のとき吐く痰は、黄緑色からにぶい  
血の色を出すようになり、時にそれは驚く程鮮かな紅  
に冴えた。堯が間借り二階の四畳半で床を離れる時分に  
は、主婦の朝の洗濯は夙うに済んでいて、漆喰は乾いて

しまっている。その上へ落ちた痰は水をかけても離れな  
い。堯は金魚の仔こでもつまむようにしてそれを土管の口  
へ持つて行くのである。彼は血の痰を見てももうなんの  
刺戟しげきでもなくなっていた。が、冷澄な空気の底に冴え冴  
えとした一塊の彩いろどりは、何故なぜかいつもじつと凝視みつめず  
にはいられなかった。

堯はこの頃生きる熱意をまるで感じなくなっていた。  
一日一日が彼を引摺ずっていた。そして裡うちに住むべきところ  
をなくした魂は、常に外界へ逃のがれよう逃れようと焦慮あせ  
っていた。——昼は部屋の窓を展ひらいて盲人のようになそと

の風景を凝視める。夜は屋の外の物音や鉄瓶てつびんの音に聾者ろうしやのような耳を澄ます。

冬至に近づいてゆく十一月の脆もろい陽ざしは、然し、彼が床を出て一時間とは経たない窓の外で、どの日もどの日も消えかかってゆくのであった。翳かげってしまった低地には、彼の棲すんでいる家の投影さえ没してしまっている。それを見ると堯の心には墨汁のような悔恨やいらだたしさか拡がってゆくのだった。日向ひなたは僅かに低地へだを距へだてた、灰色の洋風の木造家屋に駐とどままっていて、その時刻、それはなにか悲しげに、遠い地平へ落ちてゆく入日を眺めて



いるかのように見えた。

冬陽は郵便受のなかへまで射しこむ。路上のどんな小さな石粒も一つ一つ影を持っていて、見ていると、それががみな埃及エジプトのピラミッドのような巨コロツサル大な悲しみを浮かべている。——低地を距てた洋館には、その時刻、並んだ蒼桐あおぎりの幽霊のような影が写っていた。向日性を持った、もやいのように蒼白あおい堯の触手は、不知不識その灰色した木造家屋の方へ伸びて行って、其処そこに滲み込にじんだ不思議な影の痕あとを撫なでるのであった。彼は毎日それが消えてしまふまでの時間を空虚な心で窓を展ひらいていた。

展望の北隅を支えている檜かしの並樹は、或る日は、その鋼鉄のような弾性で撓しない踊りながら、風を揺りおろして来た。容貌ようぼうをかえた低地にはカサコソと枯葉が骸骨がいこつの踊りを鳴らした。

そんなとき蒼桐の影は今にも消されそうにも見えた。もう日向とは思えない其処こがらしに、気のせい程の影がまだ残っている。そしてそれは 凧こがらしに追われて、砂漠のような、其処では影の生きている世界の遠くへ、段々姿を搔かき消してゆくのであった。

堯はそれを見終わると、絶望に似た感情で窓を鎖とぎしに

かかる。もう夜を呼ぶばかりの凧に耳を澄ましていると、或る時はまだ電気も来ない何処か遠くでガラス戸の<sup>くだ</sup>擽け落ちる音がしていた。

## 二

堯は母からの手紙を受け取った。

「延子をなくしてから父上はすっかり老い込んでおしまいになった。お前の身体も普通の身体ではないのだから大切にして下さい。もうこの上の苦労はわたしたちもし

たくない。

わたしはこの頃夜中なにかに驚いたように眼が醒め  
る。頭はおまえのことが気懸りなのだ。いくら考えまい  
としても駄目です。わたしは何時間も眠れません」

堯はそれを読んである考えに悽然せいぜんとした。人びとの寝  
静まった夜を超えて、彼と彼の母が互いに互いを悩み苦  
しんでいる。そんなとき、彼の心臓に打った不吉な搏動はくどう  
が、どうして母を眼覚まさないと云い切れよう。

堯の弟は脊椎せきついカリエスで死んだ。そして妹の延子も  
腰椎ようついカリエスで、意志を喪うしなった風景のなかを死んでい

った。其処では、たくさんの虫が一匹の死にかけている虫の周囲に集まって悲しんだり泣いたりしていた。そして彼等の二人ともが、土に帰る前の一年間を横たわっていた、白い土の石膏せつこうの床からおろされたのである。

——どうして医者は「今の一年は後の十年だ」なんて云うのだろう。

堯はそう云われたとき自分の裡に起った何故か跋ぼつの悪いような感情を想出しながら考えた。

——まるで自分がその十年で到達しなければならぬ理想でも持っているかのように。どうしてあと何年経て

ば死ぬとは云わないのだろう。

堯の頭には彼に屢々しばしば現前する意志を喪うしなった風景が浮かびあがる。

暗い冷たい石造の官衙かんがの立ち並んでいる街の停留所。其処で彼は電車を待っていた。家へ帰ろうか賑にぎやかな街へ出ようか、彼は迷っていた。どちらの決心もつかなかった。そして電車はいくら待ってもどちらからも来なかった。押しつけるような暗い建築の陰影、裸の並樹、疎まばらな街燈の透視図。——その遠くの交又路には時どき過ぎる水族館のような電車。風景は俄にわかに統制を失った。

そのなかで彼は激しい滅形を感じた。

穉おきない堯は捕鼠器ねずみとりに入った鼠を川に漬けに行った。透

明な水のなかで鼠は左右に金網を伝い、それは空気のかなかでのように見えた。やがて鼠は網目の一つへ鼻を突っ込んだまま動かなくなった。白い泡が鼠の口から最後に泛うかんだ。……

堯は五六年前は、自分の病気が約束している死の前に、ただ甘い悲しみを撒まいただけで通り過ぎていた。そして何時かそれに気がついてみると、栄養や安静が彼に浸潤した、美食に対する嗜好しこうや安逸や怯懦きようだは、彼から生

きて行こうとする意志を段段に持ち去っていた。然し彼は幾度も心を取り直して生活に向かつて行った。が、彼の思索や行為は何時の間にか佯<sup>いつわ</sup>りの響をたてはじめ、やがてその滑<sup>なめ</sup>らかさを失って凝固した。と、彼の前には、そういった風景が現われるのだった。

何人もの人間がある徴候をあらわしある経過を辿<sup>たど</sup>って死んで行った。それと同じ徴候がお前にあらわれている。近代科学の使徒の一人が、堯にはじめてそれを告げたとき、彼の拒否する権限もないそのことは、ただ彼が漠然忌み嫌っていたその名称ばかりで、頭がそれを受けつ



けなかつた。もう彼はそれを拒否しない。白い土の石膏の床は彼が黒い土に帰るまでの何年かの為ために用意されている。其処ではもう転てん転てんすることさえ許されないのだ。

夜が更けて夜番の撃げ柝きたくの音がきこえ出すと、堯は陰鬱な心の底で眩つぶやいた。

「おやすみなさい、お母さん」

撃柝の音は坂や邸の多い堯の家のあたりを、微妙に変へつてゆく反響の工合で、それが通つてゆく先はるざきを髣髴ほうふつさせた。肺の軋きしむ音だと思つていた杳はるかな犬の遠吠とおほえ。

——堯には夜番が見える。母の寝姿が見える。もつとも

つと陰鬱な心の底で彼はまた呟く。

「おやすみなさい、お母さん」

三

堯は掃除をすました部屋の窓を明け放ち、籐とうの寝椅子に休んでいた。と、ジュツジュツという啼なきごえ声ながしてかなむぐらの垣の蔭に笹鳴きの鶯うぐいすが見え隠れするのが見えた。

ジュツ、ジュツ、堯は鎌首をもたげて、口でその啼き

声を模ねながら、小鳥の様子を見ていた。——彼は自家うちでカナリヤを飼っていたことがある。

美しい午前の日光が葉をこぼれている。笹鳴きは口の音に迷わされてはいるが、そんな場合のカナリヤなどのように、機微な感情は現わさなかつた。食欲に肥えふとって、なにか堅いチョツキでも着たような恰好しずえをしている。——堯が模ねをやめると、愛想もなく、下枝しずえの間を渡りながら行ってしまった。

低地を距てて、谷に臨んだ日当りのいいある華族の庭が見えた。黄に枯れた朝鮮芝に赤い蒲団が干してある。

——堯は何時になく早起きをした午前にうつとりとした。

暫くして彼は、葉が褐色に枯れ落ちている屋根に、つるもどきの赤い実がつややかに露あらわれているを見ながら、家の門を出た。

風もない青空に、黄に化かわりきつた公孫樹いちようじゆは、静かに影を畳んで休ろうていた。白い化粧煉瓦れんがを張った長い塀へいが、いかにも澄んだ冬の空気を映していた。その下を孫を負ぶった老婆が緩りゆっくり歩いて来る。

堯は長い坂を下りて郵便局へ行った。日の射し込んで

いる郵便局は絶えず扉が鳴り、人びとは朝の新鮮な空気を撒き散らしていた。堯は永い間こんな空気に接しなかったような気がした。

彼は細い坂を緩りゆっくり登った。山茶花の花ややつでの花が咲いていた。堯は十二月になっても蝶がいるのに驚いた。その飛んで行った方角には日光に撒かれた虻あぶの光点が忙しく行き交っていた。

「痴呆ちほうのような幸福だ」と彼は思った。そしてうつらうつら日溜りに屈かがまっていた。——やはりその日溜りの少し離れたところに小さい子供達がなにかして遊んでい

た。四五歳の童子や童女達であつた。

「見てやしないだろうな」と思いながら堯は浅く水が流れている溝みぞのなかへ痰を吐いた。そして彼等の方へ近づいて行つた。女の子であばれているのもあつた。男の子で溫柔おとなしくしているのもあつた。穉おさない線が石墨で路に描かれていた。——堯はふと、これは何処かで見たことのある情景だと思つた。不意に心が揺れた。揺り覚まされた虻が茫漠とした堯の過去へ飛び去つた。その麗うららかな臘月ろうげつの午前へ。

堯の虻は見つけた。山茶花さざんかを。その花片のこぼれるあ

たりに遊んでいる童子たちを。——それはたとえば彼が半紙などを忘れて学校へ行つたとき、先生に断りを云つて急いで自家へ取りに歸つて来る、学校は授業中の、なにか珍らしい午前の路であつた。そんなときでもなければ垣間<sup>かいま</sup>見<sup>み</sup>ることを許されなかつた、聖なる時刻の有様であつた。そう思つてみて堯は微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

午後になつて、日が何時<sup>いっ</sup>ももの角度に傾くと、この考えは堯を悲しくした。穉いときの古ぼけた写真のなかに、残っていた日向のような弱陽が物象を照していた。

希望を持ってないものが、どうして追憶をいづくし慈しむことが出来よう。未来に今朝のような明るさを覚えたことが近頃の自分にあるだろうか。そして今朝の思いつきも何のことはない、ロシアの貴族のように（午後二時頃の朝食）ちようさんが生活の習慣になっていたということのいい証拠ではないか。――

彼はまた長い坂を下りて郵便局へ行つた。

「今朝の葉書のこと、考えが違ってやめることにしたから、お願いしたこと御中止ください」

今朝彼は暖い海岸で冬を越すことを想い、そこに住ん



でいる友人に貸家を捜すことを頼んで遣ったのだった。彼は激しい疲労を感じながら坂を帰るのにあえいだ。午前の日光のなかで静かに影を畳んでいた公孫樹は、一日が経たないうちにもうこがらし 凧が枝を疎まばらにしていた。その落葉が陽を喪うしなった路の上を明るくしている。彼はこれらの落葉にほのかな愛着を覚えた。

堯は家の横の路まで帰って来た。彼の家からはその勾配こうばいのついた路は崖上がけうえになっている。部屋から眺めていつもの風景は、今彼の眼前で凧に吹き曝さらされていた。曇空には雲が暗澹あんたんと動いていた。そしてその下に堯は、

まだ電燈も来ないある家の二階は、もう戸が鎖されてあるのを見た。戸の木肌はあらわに外面に向つて曝されていた。——ある感動で堯はそこにたたずゐんだ。かたわ傍らには彼の棲すんでいる部屋がある。堯はそれをこれまでついで眺めたことのない新らしい感情で眺めはじめた。

電燈も来ないのに早や戸じまりをした一軒の家の二階——戸のあらわな木肌は、不意に堯の心を寄辺よるべのない旅情で染めた。

——食うものも持たない。何処に泊まるあてもない。そして日は暮れかかっているが、この他国の町は早や自

分を拒んでいる。――

それが現実であるかのような暗愁が彼の心を翳<sup>かげ</sup>っていた。またそんな記憶が嘗<sup>かつ</sup>ての自分にあつたような、一種訝<sup>いぶ</sup>かしい甘美な気持が堯<sup>いぶ</sup>を切なくした。

何ゆえそんな空想が起つて来るのか？ 何ゆえその空想がかくも自分を悲しませ、また、かくも親しく自分を呼ぶのか？ そんなことが堯<sup>いぶ</sup>には朧<sup>おぼろ</sup>げにわかるように思われた。

肉を炙<sup>あぶ</sup>る香ばしい匂いが夕凍<sup>じ</sup>みの匂に混つて来た。一日の仕事を終えたらしい大工のような人が、息を吐く微<sup>かす</sup>

かな音をさせながら、堯にすれちがってすたすたと坂を登って行った。

「俺の部屋はあすこだ」

堯はそう思いながら自分の部屋に目を注いだ。薄暮に包まれているその姿は、今エーテルのように風景に拡つてゆく虚無に対しては、何の力でもないように眺められた。

「俺が愛した部屋。俺が其処に棲むのをよろこんだ部屋。あのなかには俺の一切の所持品が——ふとするとその日その日の生活の感情までが内蔵されているかもしれ

ない。此処から声をかければ、その幽霊があゝの窓をあけて首を差伸べそうな気さえする。が然しそれも、脱ぎ棄てた宿屋の襠袍どてらがいつしか自分自身の身体をそのなかに髣髴ほうふつさせて来る作用と僅かもちがったことはないではないか。あの無感覚な屋根瓦や窓硝子まどガラスをこうしてじつと見ていると、俺はだんだん通行人のような心になって来る。あの無感覚な外圀は自殺しかけている人間をそのなかに蔵かくしているときもやはりあの通りにちがいないのだ。

——と云って、自分は先刻の空想が俺を呼ぶのに従ってこのまま此処を歩み去ることも出来ない。

早く電燈でも来ればよい。あの窓の磨硝子すりが黄色い灯を滲にじませれば、与えられた生命に満足している人間を部屋やのなかに、この通行人の心は想像するかも知れない。その幸福を信じる力が起つて来るかもしれない」

路に彳へんんでいる堯の耳に階下の柱時計の音がボンボン……と伝わって来た。変なものを聞いた、と思ひながら彼の足はとぼとぼと坂を下って行つた。

## 四

街路樹から次には街路から、風が枯葉を掃はらってしまつたあとは風の音も変って行つた。夜になると街のアスファルトは鉛筆で光らせたように凍いてはじめた。そんな夜を堯は自分の静かな町から銀座へ出かけて行つた。其処では華ばなしいクリスマスや歳末の売出しがはじまっていた。

友達か恋人か家族か、舗道の人はそのほとんどが連れ

を携えていた。連れのない人間の顔は友達に出会う<sup>あて</sup>当てを持っていった。そして本当に連れがなくとも金と健康を  
持っている人に、この物慾の市場が悪い顔をするはずの  
ものではないのであった。

「何をしに自分は銀座へ来るのだろう」

堯は舗道が早くも疲労ばかりしか与えなくなりはじめ  
るとよくそう思った。堯はそんなとき何時か電車のなか  
で見たある少女の顔を思い浮かべた。

その少女はつつましい微笑を<sup>うか</sup>泛べて彼の座席の前で釣  
革に下がっていた。どてらのように身体に添っていない



着物から「お姉さん」のような首が生えていた。その美しい顔は一と眼で彼女が何病だかを直感させた。陶器のように白い皮膚を翳かげらせている多いうぶ毛。鼻孔のまわりの垢あか。

「彼女はきつと病床から脱け出して来たものに相違ない」

少女の面を絶えず漣さざなみ漪のように起つては消える微笑を眺めながら堯はそう思った。彼女が鼻をかむようにして拭きとっているのは何か。灰を落としたストーヴのように、そんなとき彼女の顔には一時鮮かな血がのぼった。

自身の疲労とともにだんだんいじらしさを増して行くその娘の像を抱きながら、銀座では堯は自分の痰を吐くに困った。まるでものを云う度口から蛙が跳出すグリムお伽噺とぎばなしの娘のように。

彼はそんなとき一人の男が痰を吐いたのを見たことがある。不意に貧しい下駄が出て来てそれをすりつぶしたが、それは足が穿はいている下駄ではなかった。路傍に莫塵もぢんを敷いてブリキの独楽こまを売っている老人が、さすがに怒りを浮かべながら、その下駄を莫塵の端のも一つの上へ重ねるところを彼は見たのである。

「見たか」そんな気持で堯は行き過ぎる人びとを振返った。が、誰もそれを見た人はなさそうだった。老人の坐っているところは、それが往来の目に入るにはあまりに近すぎた。それでなくても老人の売っているブリキの独楽はもう田舎の駄菓子屋でも陳腐なものにちがいがなかった。堯は一度もその玩具おもちゃが売れたのを見たことがなかった。

「何をしに自分は来たのだ」

彼はそれが自分自身への口実の、珈琲コーヒーや牛酪バターやパンや筆を買ったあとで、ときには憤怒のようなものを感じな

がら高価な仏蘭西香料を買ったりするのだった。またときには露店が店を畳む時刻まで街角のレストランに腰を掛けていた。ストーヴに暖められ、ピアノトリオに浮き立って、グラスが鳴り、流眄ながしめが光り、笑顔が湧わき立っているレストランの天井には、物憂い冬の蠅が幾匹も舞っていた。所在なくそんなものまで見ているのだった。

「何をしに自分は来たのだ」

街へ出ると吹き通る空からっ風がもう人足を疎まばらにしていた。宵のうち人びとが掴つかまされたビラの類が不思議に街の一と所に吹き溜められていたり、吐いた痰がすぐに凍

り、落ちた下駄の金具にまぎれてしまったりする夜更よふけを、彼は結局は家へ帰らねばならないのだった。

「何をしに自分は来たのだ」

それは彼のなかに残っている古い生活の感興にすぎなかった。やがて自分は来なくなるだろう。堯は重い疲労とともにそれを感じた。

彼が部屋で感覚する夜は、昨夜も一昨夜も恐らくは明晩もない、病院の廊下のように長く続いた夜だった。ここでは古い生活は死のような空気のなかで停止していた。思想は書棚を埋める壁土にしか過ぎなかった。壁に

かかった星座早見表は午前三時が十月二十何日に日盛を  
あわせたまま埃ほこりをかぶっていた。夜更けて彼が便所へ  
通うと、小窓の外の屋根瓦には月光のような霜が置いて  
いる。それを見るときにだけ彼の心はほーっと明るむの  
だった。

固い寢床はそれを離れると午後にはじまる一日が待っ  
ていた。傾いた冬の日が窓のそとのまのあたりを幻燈の  
ように写し出している、その毎日であった。そしてその  
不思議な日射しはだんだんすべてのものが仮象にしか過  
ぎないということや、仮象であるゆえ精神的な美しさに

染められているのだということを露骨にして来るのだ。枇杷びわが花をつけ、遠くの日溜りからは橙だいだいの実が目を射うった。そして初冬の時雨しぐれはもう霰あられとなつて軒をはしつた。

霰はあとからあとへ黒い屋根瓦を打つてはころころ転がった。トタン屋根を撲うつ音。やつでの葉を弾はじく音。枯草に消える音。やがてサアアというそれが世間に降つている音がきこえ出す。と、白い冬の面纱ヴェールを破つて近くの邸やしきからは鶴の啼き声やしきが起つた。堯の心もそんなときにはなにか新鮮な喜びが感じられるのだった。彼は窓際に

倚よって風狂というものが存在した古い時代のことを思った。しかしそれを自分の身に当嵌あてはめることは堯には出来なかつた。

## 五

何時の隙にか冬至が過ぎた。そんなある日堯は長らく寄りつかなくかつた、以前住んでいた町の質店へ行った。金が来たので冬の外套がいとうを出しに出掛けたのだった。が、行ってみるとそれはすでに流れたあとだった。



「××どんあれは何時頃だったけ」

「へい」

暫く見ない間にすっかり大人びた小店員が帳簿を繰つた。

堯はその口上が割合すらすら出て来る番頭の顔が変に見える出した。或る瞬間には彼が非常な云憎さを押隠して云っているように見え、ある瞬間にはいかにも平気に云っているように見えた。彼は人の表情を読むのにこれ程戸惑ったことはないと思った。いつもは好意のある世間話をしてくれる番頭だった。

堯は番頭の言葉によって幾度も彼が質店から郵便を受けていたのをはじめて現実<sup>じゆんじつ</sup>に思い出した。硫酸に侵されていような気持の底で、そんなことをこの番頭に聞かしたらというよような苦笑も感じながら、彼もやはり番頭のような無関心を顔に装って一通りそれと一緒に処分されたものを聞くと、彼はその店を出た。

一匹の瘦<sup>や</sup>せ衰えた犬が、霜解けの路ばたで醜い腰附を慄<sup>ふる</sup>わせながら、糞<sup>ふん</sup>をしようとしていた。堯はなにか露悪的な気持にじりじり迫られるのを感じながら、嫌<sup>けん</sup>悪<sup>お</sup>に堪えたその犬の身体つきを、終るまで見ていた。長い帰り

の電車のなかでも、彼はしじゅう崩壊に屈しようとする自分を堪えていた。そして電車を降りて見ると、家を出るとき持って出た筈の洋傘は——彼は持っていなかった。

あてもなく電車を追おうとする眼を彼は反射的にそらせた。重い疲労を引摺りながら、夕方の道を帰って来た。その日町へ出るとき赤いものを吐いた、それが路ばたのむくげ権の根方にまだひっかかっていた。堯には微かな身慄ぶるいが感じられた。——吐いたときには悪いことをしたとしか思わなかったその赤い色に。——

夕方の発熱時が来ていた。冷い汗が気味悪く腋わきの下を伝った。彼は袴はかまも脱がぬ外出姿のまま凝然と部屋に坐っていた。

突然あいくち匕首のような悲しみが彼に触れた。次から次へ愛するものを失っていった母の、ときどきするとぼけたような表情を思い浮かべると、彼は静かに泣きはじめた。

夕餉ゆうげをしたために階下へ降りる頃は、彼の心はもはや冷静に帰っていた。そこへ友達の折田というのが訪ねて来た。食欲はなかった。彼はすぐ二階へあがった。

折田は壁にかかっていた、星座表を下ろして来て頻しきり

に目盛を動かしていた。

「よう」

折田はそれには答えず、

「どうだ。雄大じゃあないか」

それから顔をあげようとしなかった。堯はふと息を嚙のんだ。彼にはそれがいかに壮大な眺めであるかが信じられた。

「休暇になったから郷里へ帰ろうと思ってやって来た」

「もう休暇かね。俺はこんどは帰らないよ」

「どうして」

「帰りたくない」

「うちからは」

「うちへは帰らないと手紙出した」

「旅行でもするのか」

「いや、そうじゃない」

折田はぎろと堯の目を見返したまま、もうその先を訊きかなかつた。が、友達の噂学校の話、久潤きゆうかつの話は次第に出て来た。

「この頃学校じゃあ講堂の焼跡を毀こわしてるんだ。それがね、労働者が鶴嘴つるはしを持って焼跡の煉瓦壁へ登って……」

その現に自分の乗っている煉瓦壁へ鶴嘴を揮ふるっている労働者の姿を、折田は身振りをまぜて描き出した。

「あと一と衝つきというところまでは、その上にいて鶴嘴をあてている。それから安全なところへ移って一つぐわんとやるんだ。すると大きい奴がどどーんと落ちて来る」  
「ふーん。なかなか面白い」  
「面白いよ。それで大変な人気だ」

堯らは話をしていくだけでも茶を飲んだ。が、へいぜい自分の使っている茶碗で頻しきりに茶を飲む折田を見ると、その度彼は心が話からそれる。その拘こう泥でいがだんだ

ん重く堯にのしかかって来た。

「君は肺病の茶碗を使うのが平気なのかい。咳をする度にバイキンはたくさん飛んでいるし。——平気なんだつたら衛生の観念が乏しいんだし、友達甲斐がにこらえてい  
るんだつたら子供みたいな感傷主義に過ぎないと思うな  
——僕はそう思う」

云ってしまった堯は、なぜこんないやなことを云ったのかと思った。折田は目を一度ぎろとさせたまま黙っていた。

「しばらく誰も来なかったかい」



「しばらく誰も来なかった」

「来ないとひがむかい」

こんどは堯たかしが黙った。が、そんな言葉で話し合うのが堯にはなぜか快かった。

「ひがみはしない。しかし俺もこの頃は考え方が少しちがって来た」

「そうか」

堯はその日の出来事を折田に話した。

「俺はそんなときどうしても冷静になれない。冷静というものは無感動じゃなくて、俺にとっては感動だ。苦痛

だ。しかし俺の生きる道は、その冷静で自分の肉体や自分の生活が滅びてゆくのを見ていることだ」

「……………」

「自分の生活が壊れてしまえば本当の冷静は来ると思う。水底の岩に落ちつく木の葉かな。……………」

「丈草じょうそうだね。……………そうか、しばらく来なかったな」

「そんなこと。……………しかしこんな考えは孤独にするな」

「俺は君がそのうちに転地でもするような気になるとい  
いと思うな。正月には帰れと云って来ても帰らないつも  
りか」

「帰らないつもりだ」

珍しく風のない静かな晩だった。そんな夜は火事もなかった。二人が話をしていると、戸外にはときどき小さい呼子のような声のものが鳴いた。

十一時になって折田は帰って行った。帰るきわに彼は紙入のなかから乗車割引券を二枚、

「学校へとりにゆくのも面倒だろうから」と云って堯に渡した。

## 六

母から手紙が来た。

——お前にはなにか変わったことがあるにちがいない。  
それで正月上京なさる津枝さんにお前を見舞って頂くこと  
にした。その積りでいなさい。

帰らないと云うから春着を送りました。今年は胴着を  
作って入れておいたが、胴着は着物と襦袢じゅばんの間に着るも  
のです。じかに着てはいけません。——

津枝というのは母の先生の子息で今は大学を出て医者をしていた。が、嘗て堯にはその人に兄のような思慕を保持っていた時代があった。

堯は近くへ散歩に出ると、近頃は殊ことに母の幻覚に出会った。母だ！　と思つてそれが見も知らぬ人の顔であるとき、彼はよく変なことを思つた。——すーつと變つたようだった。また母がもう彼の部屋へ来て坐りこんでいる姿が目にはちらつき、家へ引返したりした。が、来たのは手紙だった。そして来るべき人は津枝だった。堯の幻覚はやんだ。

街を歩くと堯は自分が敏感な水準器になってしまったのを感じた。彼はだんだん呼吸が切迫して来る自分に気がつく。そして振返って見るとその道は彼が知らなかった程の傾斜をしているのだった。彼は立停まると激しく肩で息をした。ある切ない塊が胸を下ってゆくまでには、必ずどうすればいいのかわからない息苦しさを一度経なければならなかった。それが鎮まると堯はまた歩き出した。

何が彼を駆るのか。それは遠い地平へ落ちて行く太陽の姿だった。

彼の一日は低地を距てた灰色の洋風の木造家屋に、どの日もどの日も消えてゆく冬の日にも、もう堪えきることが出来なくなつた。窓の外の風景が次第に蒼あおざめた空気あおのなかへ没してゆくとき、それが既にただの日蔭ではなく、夜と名附けられた日蔭だという自覚に、彼の心は不思議ないらだちを覚えて来るのだつた。

「あああ大きな落日が見たい」

彼は家を出て遠い展望のきく場所を捜した。歳暮の町には餅搗もちきの音が起つていた。花屋の前には梅と福寿草をあしらつた植木鉢が並んでいた。そんな風俗画は、町

がどこをどう帰っていいかわからなくなりはじめるとつれて、だんだん美しくなった。自分のまだ一度も踏まなかつた路——其処では米を磨いでいる女も喧嘩をしていゝる子供も彼を立停まらせた。が、見晴らしはどこへ行つても、大きな屋根の影絵があり、夕焼空に澄んだ梢こずえがあつた。その度、遠い地平へ落ちてゆく太陽の隠された姿が切ない彼の心に写つた。

日の光に満ちた空気は地上を僅かも距つていなかつた。彼の満たされない願望は、ときに高い屋根の上へのぼり、空へ手を伸している男を想像した。男の指の先は



その空気に触れている。——また彼は水素を充した  
石鹼玉シヤボンだまが、蒼ざめた人と街とを昇天させながら、その空  
気のなかへパツと七彩なないろに浮び上る瞬間を想像した。

青く澄み透った空では浮雲が次から次へ美しく燃えて  
いった。みたされぬ堯おきの心の燠おきにも、やがてその火は  
燃えうつつた。

「こんなに美しいときが、なぜこんなに短いのだろう」  
彼はそんなときほどはかない気のするときはなかつ  
た。燃えた雲はまたつぎつぎに死灰になりはじめた。彼  
の足はもう進まなかつた。

「あの空を満してゆく影は地球のどの辺の影になるかしら。あすこの雲へゆかないかぎり今日ももう日は見られない」

にわかには重い疲れが彼に凭よりかかる。知らない町の知らない町角で、堯の心はもう再び明るくはならなかった。

——一九二七年三月——





日本文学電子図書館

---

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷

---



日本文学電子図書館